

伝上杉謙信所用胴服八領 中

伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告四

神 谷 榮 子

(3) 白地桐文綾、襟繡胴服 (図版II a、挿図7、8)

桐文が互の目に織り出されている白綾地の胴服で、襟は紅染の練緯地^{註30}に、襟首の中央に柳(挿図9)、上前(胴服自体の左側で向って右側、挿図7参照)に上から菊の折枝、丸に沢瀉、藤の折枝、松、蔓蔦、扇面、雪持柳、下前(上前の逆、挿図8参照)に同じく上から菊に似た蔓花の折枝、蔓のある桐の折枝、丸に撫子、雪持芦、短冊、九枚笹の丸、あこだ瓜が刺繡でほぼ等間隔に縦に並べておかれている。この刺繡の模様は襟の外側につけられているので一覽表(報告四、上、美術研究二四二号)にも示したように、襟は襟首の部分を内側に折って着装されたことが必然的に考えられる。

裏は紅練緯の通し裏で、表の白綾地との対照が派手である。襟裏、即ち刺繡のない側の襟裂も胴裏と同質の紅の練緯で、表襟には紅の褪色がみられるが、これら裏裂には褪色が殆ど認められず、また染めむらもなく鮮やかな紅色を呈している。^{註31}

伝上杉謙信所用胴服八領 中

刺繡の施されている表襟の裂は、目のつんだ極めて上質な練緯(後述表襟裂の地合参照)で、紅染も(2)の襟裂と同様極めて純度の高い紅染で、褪色はしているが、黄味の少い透明度の高い紅の色が残っている。このように地質も染も極上の襟裂に、(2)の刺繡と同じ手ではなからうかと思われる高度な刺繡技術で模様があらわされている。

模様は、襟裂の紅をバックに萌黄、鶯色の緑系の色が主調で、次いで白が多く用いられている。次に紫、この襟の刺繡に用いられている紫色は、(2)の柳の幹の紫と異り、濁りのないきれいな紫色で、どの部分にも痛みが見られない。紫根染であろう。ほかに浅葱、濃浅葱、薄浅葱、橙色がかつた紅(サモンピンク)、橙色がかつた薄紅(薄いサモンピンク)、紅(トキ色、ピンク)、薄紅(薄いトキ色、薄いピンク)、金茶がかつた黄色、緑がかつた黄色、黄色、紫と白の撚り合わせの糸糸の十五色の刺繡糸が用いている。以上の糸は(2)の刺繡糸同様絹糸で、紫と白の撚り合わせの糸糸(芦の穂と短冊の紐に用いられている)以外は何れも平糸である。糸糸の使いわけは(2)の場合と同様、葉や茎は萌黄や鶯色の緑系、花は

基調にその花の色、雪は白といったように総じて実際の物に即した、或はそれに近い色の濃淡を効果的に繊細に使い分けながら処々に写真からは離れた色が或時はアクセントの役を、或時は柔か味を添える役目を果たすように配してあり、また葉や花をきっぱりと途中で色を変えたり室町・桃山期の刺繡の特徴がよくあらわれている。

刺繡の技法も(2)と同様、室町・桃山期の刺繡の特徴が顕著である。大部分が渡し繡で、大きく糸が渡っている部分には抑えの線繡が入っている。枝、茎、蔓、藤や桐の花房の茎などは、いわゆる纏繡で繡われており、針目の半分から三分の一ぐらい返して進んでいる返し繡であることも(2)と同様である。

挿図7 白地桐文綾、襟繡胴服(3) 上前 山形 上杉神社蔵

刺繡技術は極めて優れており、模様の一つ一つがくつきりと鮮やかに現されている。大きく渡った渡し繡の繡糸が、よく目がつんで見事に揃っており、刺繡部分に紙の裏打が行われている形跡も認められない^{註32}にもかかわらず少しのひきつりも見られないのは、刺繡技術の優秀さに加えて、この襟裂の地合が密であることにも依っていると思われる。この襟裂の紅染が、(2)の辻ヶ花染の襟裂と共に、極めて純度の高い紅染であることも考え合わせると、優秀な刺繡技術者が、刺繡裂の地質や染色にもこまかく吟味し配慮したことが推測される。

襟を飾る計十五の模様は、ほぼ間隔を同じくし、模様の大きさは、丸紋が直径八・八・五センチ、扇面の部分は幅八・五センチ、高さ八センチ

挿図8 白地桐文綾、襟繡胴服(3) 下前 山形 上杉神社蔵

挿図9 胴服(3) 襟首まわり部分

チで、他は幅八・五センチ、高さ一〇〜一二センチになっている。模様の大きさも間隔も大差なく、バランスよく並列させてあるといえるであろう。襟の中央、左右の模様の基点になっている柳は、樹の方向が着装時首に添って立つよう安排されており(挿図9)、細心な配慮がうかがわれる。

1 柳(挿図9)

この柳は、幹と枝の形の上

挿図10 胴服(3) 襟部分

の表現は(2)の雪持柳の幹や、枝と同じで、室町・桃山時代染織意匠の典型的な樹木の表現法である。幹は(2)の柳の幹と同様紫糸であらわされているが、これは紫の色が美しく、また糸の損傷も見られない。幹の輪郭線と木はだをあらわす線は白、苔は白と薺色の割りませ糸、枝と葉は、一本おきに薺色と萌黄になっている。

2 菊の折枝(挿図9)

室町・桃山時代の菊の折枝によく見

られる形で、蕾を伴った花二つ(ここでは一つは裏菊)を持った枝である。葉は萌黄と薺色で葉脈の線繻は薄紅、茎と裏菊の萼、蕾の花弁を示す線(蕾の渡し繻の抑え糸のように見える)は萌黄、正面花の菊は白で上方は薄紅、蕊の部分は金茶がかかった黄、花瓣の線は正面花の菊も裏菊も薄紅、蕾は薄紅と白になっている。

3 丸に沢潟(挿図7、10)

丸が紫、葉は萌黄と薺色の色替えて、葉の中央部の線繻は薄紅、茎は萌黄、花は白。

4 藤の折枝(挿図7、10)

色といい形といい繊細に優麗な藤の折枝である。蝶の触角のような形の、小さくて可愛い蔓がついている。この藤の折枝に限らずこの襟裂の模様につけられた蔓は、この種の小さく愛らしい形の蔓であるが、これは室町から桃山初頭にかけての蔓模様特有の形で、桃山のものになると蔓は大きく手を延ばしたような形に変化する。

茎、蔓及び上方二枚の葉は萌黄で、その萌黄色の葉の葉脈は薄紅、三枚

中下方一枚の葉は鶯色で、その葉脈は橙色がかった紅(サモンピンク)、花は白、紫、濃萌黄、花の蕊(花の中央に短い線繻であらわされている)は、向って左側の房の白い花と、向って右側の房の尖端三つの白い花には紫、向って右側の房の白い花尖端三つを除いた六つには浅葱、紫の花と濃萌黄の花には白が用いてある。

5 松(挿図7、10)

幹と枝は紫、幹の輪郭線と木はだを示す線は白、苔は白と鶯色の割りませ糸で1の柳と全く同じである。葉は萌黄と鶯色(新芽の部分が鶯色)で、萌黄の部分にある抑え糸は橙色がかった紅(サモンピンク)。

6 蔓蔦(挿図7、10)

黄緑色の五瓣花をつけた蔓蔦で、葉の中央下方の突起部は鶯色、左右は萌黄、茎、蔓は萌黄(向って右の上から二本目の蔓は尖端部が萌黄、花に寄った方が鶯色で途中がほかしくなっている)。葉の中央の小さな円形と鶯色部分の葉脈は橙色がかった紅(サモンピンク)で、萌黄色の部分の葉脈は橙色がかった薄紅(薄いサモンピンク)、花は緑がかった黄色で、花瓣の輪郭線は薄いサモンピンク。各花瓣の中央部と花の蕊は萌黄。

7 扇面(図版II a、挿図7)

金地と浅葱地の二面の扇面を優雅に組み合わせた図柄である。金地の扇面には撫子、浅葱地には三つ盛亀甲を配してある。金地の表現には金茶がかった黄色の繻糸を横に大きく平行して渡し繻し、同色の繻糸で斜に糸を渡して抑え繻がしてある。この方法は(2)の雪の表現にも処々見られたもので比較的広い面積の無地の部分を表現する繻法のように^{註33}、浅葱地の扇面にもこの繻法が用いてある。金地の扇面の輪郭線は紫、浅葱地の扇面の輪郭線は白。撫子の花は紅、蕊は金茶がかった黄、葉は萌黄。三つ盛亀甲は亀甲の外側の輪郭線が白、内側の輪郭線が紫。亀甲の中の花はサモンピンク。

8 雪持柳(図版II a、挿図7)

この図柄は、(2)の雪持柳の枝の部分と同種と見てよいであろう。雪の積り方も、こぼれ落ちる雪の塊も全く同じである。雪は白、雪の抑え糸も白、葉と枝は萌黄と鶯色。

9 菊に似た蔓花の折枝(挿図8、9)

花か実か判別できない白い丸いものが三つ、菊の葉に似た葉を持つ蔓の出ている茎についている。丸い部分の白糸の渡し繻は、7の模様の扇面地の部分や8の雪持柳の雪、11の丸に撫子の花瓣、12の雪持芦の雪、13の短冊の地等に見られる渡し繻と同じ繻法が用いてあり、また輪郭線が白繻糸の纏繻で行われているところを見ると、恐らく白い塊のように見える花か、白い実を表現したものであると考えられる。現在のところこの植物は何であるか不明である。茎、蔓は萌黄、葉は萌黄と鶯色、葉脈は、萌黄色には薄紅、鶯色にはサモンピンクが用いられている。

10 蔓のある桐の折枝(挿図8、10)

肩裾の模様の中に屢々見られる桐の模様(挿図11参照)から一部分枝を折

挿図11 桐竹鳳凰等模様肩裾 部分
東京国立博物館蔵

挿図12 b. aの背面左脇下方部分

挿図12 a. 紅地辻ヶ花入繡箔

東京国立博物館蔵

って取り出して来たような模様で、これと同様な模様が東博蔵紅地辻ヶ花入繡箔の背面左脇下方の部分に見られる(挿図12 a, b)。葉、茎、蔓は萌黄、鶯色、葉脈は9と同様萌黄には薄紅、鶯色にはサモンピンクの繡糸が用いられている。花房の茎は紫、桐の花は全部白。

11 丸に撫子(挿図8、10)

丸は白で、撫子は紫、この紫の花弁は7の扇面の地と同じ繡法、花弁の外側の輪郭に見られる刺し繡風な線繡と内側の輪郭線の繡は白。花の蕊は金茶がかかった黄色、蕊のまわりの纏繡も蕊と同色。

12 雪持芦(挿図8、10)

この手の芦の図様は、室町・桃山期の染織品には屢々あり、特に繡箔に多く見られる。葉と茎は萌黄と鶯色、葉の中央の筋は薄紅、穂は白と紫の燃り合わせの杳糸(Z燃)。

13 短冊(挿図8、10)

短冊は二枚重ねて結んであり、手前の短冊には菖蒲に撫子、奥の短冊には源氏香のような模様(源氏香だとすると上のは藤袴、中のは真木柱、下のは四本であるから源氏香にはなっておらない)と撫子が見えている。短冊の地は、繡法は7の扇面の地と同じで、地色は、手前は上から紫、金茶がかかった黄(扇面と同様金色を示しているであろう)、浅葱(この部分には薄紅の斜線があり、水をあらわしたのかと思われる)、紫、白となっている。奥の短冊は上から白、金茶がかかった黄(ここには萌黄の纏繡による線が入っている。この部分は短冊の裏面が見えていることになるが)、紫、浅葱となっており、鶯色で縁取りがしてある。手前の短冊の菖蒲は、花は白、茎は萌黄、葉は萌黄と薄紅で表現されている。その下の撫子は側面花で、花と蕾は薄紅、茎と葉は鶯色。奥の短冊の源氏香のような模様は濃い浅葱、撫子は正面花で、花と蕾は薄紅、茎と葉は鶯色であるが、正面花のすぐ下の葉二枚(左右一枚ずつ)は橙色がかかった紅、即ちサモンピンク。短冊の結び紐は芦の穂と同じ白と

紫の撚り合わせの杣糸。

14 九枚笹の丸 (図版II a、挿図8)

(5)の胴服の九枚笹の丸と同種の図様である(図版I、挿図20参照)。笹の丸の部分は萌黄、葉は萌黄と鶯色、笹の丸の節と葉の中央の筋は薄紅。

15 あこだ瓜 (図版II a、挿図8)

あこだ瓜は鎌倉ごろから桃山初頭ごろまで工芸意匠にも時々見られる模様で、染織品では比較的時代の古い肩裾に、あこだ瓜、或はあこだ瓜模様の屢々見受けられる(挿図13参照)^{註34}。この襟裂に見られる模様はあこだ瓜と見做してよいであろう。葉、茎、蔓は萌黄色と鶯色、葉脈は向って右側二枚の葉には薄紅、向って左側の一枚は鶯色の葉であるが萌黄色で葉脈が縋ってある(萌黄色の葉脈はこだけ)。瓜は白で、輪郭線は、上方の丸形上向きの瓜には黄色(この黄色はこの襟ではここにだけしか用いられていない)。

挿図13 a. アイヌ旧蔵肩裾 東京国立博物館蔵



挿図13 b. aの書起こし図 (右袖・胸部分)

(5)の胴服に用いられている黄色と同色)、下方横向きの瓜には薄紅が用いてある。

以上、述べてきたように、これら十五の単独模様は、個々の模様についても何であるか不明のものもあり、更に模様自体の意義、十五の模様が相互に関連する意義等、現段階では深く究めてはおらず、今後に残した課題とした。しかし、これらの模様を通して言えることは、模様の素材が広範囲に互って豊富で、しかも自由に扱われており、変化に富んでいることで、これは近世におけるわが国の工芸意匠の特徴と一致し、すでに室町末には染織品においては、それらの特徴があらわれ始めていたことを示している。

胴服全体の白場に対する襟の紅の比率、襟裂の模様の大ささ、間隔、配列、色の配置、紅裏との対照等、この胴服にもバランスのよい統一のとれた意匠効果がうかがわれ、用いられている上質の裂地、染、繡、仕立の技術の優秀さを加え、この胴服は(1)(2)(5)の胴服に次ぐ優品だといえることができる。

(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覽表(報告四、上、美術研究二四二号)の(3)。総重量八八〇グラム相

当の綿が入った胴服である。裏は通し裏、袖口、裾ともに袖があり、袖口の袖は約〇・八センチ、袖山より二三センチの位置に、両袖ともに白絹糸の袖口留——二回巻いて結んである——がある。袖口綿は裏袖の袖口の袖にふくませてあり、約一・五センチ内側に入ったところに約二・五〜三センチ間隔に紅の絹糸（二本燃り合わせらしく太い。Z撚）で綿がとじてある。裾の袖は左右の袷先、背割れの左右の端は何れも角に出ている。袖の幅は〇・四〜〇・八センチ。背縫の折被せは表は正常（美術研究二二八号二〇頁挿図3参照）、裏は逆、ただし、この裏の折被せは襟附より約一二センチ下ったところから下は正常。袖附は表裏共に平縫、折被せは表裏共袖の方が高く（上に）なっている。襟は襟附のところは表裏共平縫、約一五センチ間隔で表裏のと同じ合わせが行われており、襟の表裏が突き合わせになる側はくけ合わせてある。表襟が高く（上に）なっている。即ち裏襟に綿がふくませてあり、その後で表襟がくけつけてある。この仕立を見ると表と裏とを別々に縫い合わせておいて、裾合わせをし、その後で綿を入れ、襟と

挿図14 胴服(3)の地文

じをし、襟下（立襟）をくけ、表裏の襟の突き合わせ、袖の表裏の突き合わせのくけつけを行ったことがわかる。袖口下の折被せや衿つけの折被せには表裏共に統一性がない。^{註36}
 紐は赤の四つ打丸紐で、^{註31}
 裏と共裂の乳につけてある。乳の位置は衿下りの位置から二二センチ下ったところで、乳は約一センチ幅

二・五センチ出ている。上前（胴服自体の左側、向って右側）の乳はくけ目が下、わなが上、下前（上前の逆）の乳はくけ目が上、わなが下と逆についている。

縫糸は、袖口の綿のと同じ糸（前出）を除いて白絹糸が用いてあり、平縫は比較的細い糸でS撚、くけ目は太い糸でZ撚。縫目は約〇・五センチで裾合わせの針目は約〇・八センチ、くけ目は一〜二センチの大きな針目になっている。

（表裂）

身頃

地合——地は経の六枚綾で（右上り）、文はその裏組織で緯の六枚綾（左上り）、経糸は一センチ間に六〇本前後、緯糸は一センチ間に三〇本前後。報告二（美術研究二二八号）の小袖の中綾地九領と同じ地合である。

桐文の文様、大きさ——文様は挿図14、五七の桐が互の目に配列されている地文で、大きさは幅が四・三センチ前後、高さ三・七センチ前後。

桐文は肩山線、袖山線に向かい合っており、従って肩山線、袖山線に縫目がないにもかかわらず、模様は前後共桐が上向になって片面で逆になるようなことにはなっていない。これは織る前から計画された意匠計画の上でも周到に配慮された織で、前出綾小袖九領にも共通して見られたところである。

襟

紅色の練緯で、地合は経は細く一センチ間に四四本前後で二本ずつ寄り、緯糸は一センチ間に三六本前後。この刺繍の施してある練緯は地がつまっているのできめがこまかく張りがある。紅の後染で、^{註31}
 のものとしては褪色が感じられるが、しかし純度の高い紅で染められたため褪色していても黄味が少く、トキ色の澄んだピンクである。

(裏裂)

身頃の裏も襟裏も同質の練緯で、地合は経糸は細く一センチ間に四〇本前後で二本ずつ寄っており、緯は一センチ間に三二本前後、紅の後染で、裏襟の一部に褪色が見られるほかは、極めて鮮やかな色が残っている。

(4) 白地五重襷牡丹唐草文綾、襟繡胴服(図版Ⅱb、挿図15)

五重の襷の間に牡丹唐草と卍が互の目に織り出されている白綾地の胴服で、襟は紅染の練緯地に、松皮菱と稻妻文が地文として刺繡され、その

挿図15 白地五重襷牡丹唐草文綾、襟繡胴服(4) 山形 上杉神社蔵

挿図16 b. aの襟部分 下前胸 註37参照

挿図16 a. 太閤拝領紙衣胴服(修理後写真)
静岡 石川家蔵

上に菊の折枝、雪持柳、柳の枝、桐紋が散らし模様として刺繍してある。この刺繍の模様も(3)と同様襟の外側につけられているので、襟は襟首のところを内側に折って着装されたことが考えられる。

裏は紫平絹の通し裏で、襟裏もこの紫平絹が用いてある。この裏裂は練緯ではなく、経糸も練ってある練絹で、節織になっている。紫の色が美しい。表の白、襟や紐の紅、裏裂の紫の対比対照が効果的である。

襟の刺繍は、図柄はともかくとして、刺繍技術と色の冴えで(2)(3)(5)の胸服の刺繍にくらべ見劣りが目立つ。刺繍された襟裂がひきつ、つたりはしていないが(刺繍部分に紙の裏打はないように観察されたが明らかではない)、渡し縷の縷糸のつまり方が比較的粗く、また糸がよく揃っているとはいえない。所々に下絵の墨描の線が見える。

襟の刺繍は紅の練緯地に橙色がかった紅(サモンピンク)の濃淡、薄紅(薄いトキ色、薄いピンク)萌黄、鶉色、黄、白でどの色が多いとも感じさせないあわい柔かな調子を作り、そこに引き締め役のように浅葱の濃淡、紫(この紫は茶味がかった濁ったような褪せたような色を呈しておりあまりよい色ではない。しかし糸の痛みは見られない)が所々に加えられている。使用されている縷糸は以上十種で、色糸の使いわけ、刺繍技法は(2)(3)と同様に室町・桃山時代の刺繍の特徴がよくあらわれている。

この襟裂に、図様色調等よく似ているのが静岡市の石川家に伝来している大閣拝領紙衣胸服(挿図16)^{註37}の襟裂、袖口裂で、この襟裂や袖口裂は、松皮菱地に菊の折枝の模様で、稻妻文と雪持柳、桐紋はない。紅の練緯地にサモンピンクの濃淡、薄紅、萌黄、鶉色、黄、白、紫、浅葱濃淡の適宜入り混った柔かい調子の松皮菱は、色の使い方や大きさ等極めて似

伝 上杉謙信所用胸服八領中

通っている。菊の折枝は図様、色調は似ているが、縷法が多少異っている。^{註38}

襟裂の襟首の部分は、背縫の延長線上と左右両襟肩アキの延長線上(背縫線の位置から両側に七・二センチ寄ったところ)に各一本宛計三本、鶉色で区割線が縷っており、右側に松皮菱、左側に稻妻文に雪持柳が、着装した時に模様が横向きにならぬよう双方とも模様が立てて入れている。(3)の柳の模様の場合と同様着装時を考慮した行き届いた配慮がうかがわれる。

菊の折枝は左右に一枝ずつで、着装した場合何れも腰線あたりになる位置にある。桐紋も左右に一つずつで、左(胸服自体の左、上前側)は上

挿図17 胸服(4)の地文

方(挿図15参照)に、右(胸服自体の右、下前側)は下方に配してある。地文になっている松皮菱の大きさは幅八・五センチ、高さ四・五センチ、菊は左(上前)

のが幅九・八センチ、高さ一一センチ、右(下前)のが幅一〇・三センチ、高さ一〇センチ、桐紋は五七の桐で二つとも幅五センチ、高さ五センチ。

(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覧表(報告四、上、美術研究二四二号)の(4)。八領中、身丈、袖丈共に最も短く、また袖幅も狭く、かつ衽もない全体小ぶりの胴服であるにもかかわらず総重量が七五グラムあることからわかるように綿が厚く入った胴服である。紅練緯平ぐけの紐にも綿が入っている(②の紐の綿よりは薄い)。挿図でも見られるように右脇裾にし、み、あとがある。裏は通し裏、襟裏も身頃の裏と同じ裂が用いてある。袖口、裾ともに衿があり、袖口の衿は約一センチ、袖口綿が衿にふくませてあり、約一・五センチ入ったところに二・五センチ間隔に白絹糸で綿がとじてある。袖口留はない。裾の衿は約一センチで、上前、下前の衿先及び背割れの左右の端は剣先風に仕立ててある。背縫の折被せは、表裏ともわれわれがいう正常な方向(美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照)になっている。袖附も襟附も表裏別々に行い、裾合わせを行った後、表裏の襟下のくけ合わせを行い、襟附けの中とじ(この胴服では襟の中央、即ち背縫線のところだけの中とじが現在ある。あとは糸がとれてしまったのか、中とじを行っていないのか不明)を行い、表裏のくけ合わせが行われているようである。袖附は表裏とも袖が高く(上に)なっており、襟の表裏くけ合わせのところは裏が高く(上に)なっている。即ち表の襟裂に綿をふくませた後、裏襟をとじつけたことになる。肩山より二七・五センチ下った裏身頃と裏襟の縫い目の位置に胸紐が直接挟みこんで縫いつけてある。左右ともわなが上、縫目が下についている。縫糸は、表、裏、紐ともに平縫もくけ目も白絹糸S撚の比較的細い糸が用いてあり、縫目は約〇・五センチ(裾合わせの縫目も)、くけ目は一・一

五センチの針目となっている。

(表裂)

身頃

地合——地は経の三枚綾で、(左上り)、文は緯の六枚綾で、(左上り)。経糸は一センチ間に六〇本前後、緯糸は一センチ間に四二本前後で打ち込みがよく、全体にしゃきしゃきした感じの地質である。

文様、大きさ——文様は挿図17で見られるように五重襷の中に牡丹唐草と卍が互の目に配されている。牡丹唐草は、正面花の列と側面花の列が一段おきの構成で、それらは花も葉も上、下の向きを反対方向にとっている。^{註39}文様の大きさは、牡丹の正面花で測って、長径が約二・五センチ、短径が一・八センチ。

襟

紅色の練緯で、地合は、経糸は細く一センチ間に四四本前後で二本ずつ寄っており、緯糸は一センチ間に三六本前後。^{註31}紅の後染で、上杉家伝来のものとしては褪色が目立つ。紅の色に黄味が多く、比較的透明度も少ない。

紐

紅色の練緯で地合は襟裂と同じ。^{註31}紅の後染で、褪色は殆ど認められず、黄味の多い比較的透明度の低い紅色である。襟裂と同じ紅染の裂であったと思われる。

(裏裂)

身頃の裏も襟裏も同質の裂である。経緯ともに精練した糸で織った平絹で、緯糸にとりどころ節がある。節織としては比較的薄手で、手ざわりが柔かである。地合は、経糸は一センチ間に三四本前後、緯糸は一センチ間に三二本前後。紫の後染で、染めむら、褪色、損傷のない、色に透明度

挿図19 胴服(5)襟部分

挿図18 浅葱綾竹雀紋繻, 襟摺箔描絵胴服(5)背面 山形 上杉神社蔵

のある美しい紫色である。紫根染であろう。

(5) 浅葱綾竹雀紋繻、襟摺箔描絵胴服(図版1、挿図18、19、20)

光沢のある薄い浅葱色の綾地に、紋所の位置に五ヶ所と両脇に二ヶ所の計七ヶ所、色調もあでやかな刺繻による九枚笹の丸に雀の紋様がつけられている。襟は紅の練緯地に、立涌、桐紋が、金銀(銀はごく少い)の摺箔、胡粉、墨、朱による描絵で襟の両面につけられている。襟は一枚の裂を二つ折にして(従って両面はわなで繫っている)つけたもので、模様も両面に同じようについているから一覽表(報告四、上、美術研究二四二号)にも示したように、襟は襟首のところの内側、外側何れにでも折



挿図20 胴服(5) 左胸部分 (図版I参照)

れるようになってい
る。ただこの胴服の
襟には、襟首まわり
の内側に襟附から五
〜五・五センチ上っ
たところに、外側に
襟を折った折線が明
瞭にあり、紅の褪色
の具合もそのことを
裏付けているので、
図版Iのようにこの
襟は(2)と同様外側に
折って着装されたこ

とがわかる。

裏は紅練緯の通し裏で、表の光沢のある薄浅葱の綾と、光沢のある紅練緯の襟、紐、裏との対照が品よく見事である(図版I)。襟も裏も紐も紅の褪色が少い。

襟の摺箔描繪は、立涌の一模様長さが一〇・五センチで、幅八センチ、太さ一・二センチ。桐紋は五三の桐で、幅、高さともに何れも二・八センチ前後である。写真でも見られるように金箔など比較的よく残っている。立涌も桐紋もはじめ墨の細い線描で輪郭が描かれており、その後で箔置きが行われている。箔は大部分が金箔であったと推察される^{註40}。桐紋の葉の部分は箔と胡粉の二種類で、箔の分には朱で、胡粉の分には膠質の強い墨のようなもの(光沢が多く、太い線)で、輪郭と葉脈が上描されている。桐の花の部分は何れも金箔である。

襟につけられた模様は、(2)(3)(4)と同様襟首まわりの部分が、襟の模様の基点になる様式になっており、その部分の模様が横向きにならぬよう、襟首に当るところは、立涌も桐紋も、襟の内側、外側ともに模様を立ててある(図版I、挿図18参照)。(4)と同様左右両襟肩アキの延長線上(背縫線の位置から両側に六・五センチ寄ったところ)に墨で区劃線が描いてある。

九枚笹の丸に雀の紋様は、何れも九枚笹の丸を三つ盛に組ませ、左右に一羽ずつ雀を飛ばしてある(雀の向きと形は劃一的ではない)。こうした単位の紋様を七ヶ所に、即ち、両胸は肩山から一二センチ下った位置に紋様の上端があり、背面は中央(背の紋様)が五センチ、両側(両袖の紋様)が八・五センチ肩山から下った位置に、両脇は袖下線から一八セ

ンチ下った位置に紋様の上端が来るよう配してある。(図版I、挿図18参照)。

丸紋の大きさは、外径が五・六センチ、内径が四・五センチで、笹の丸の太さは約〇・五センチ、笹の葉の長さは約二センチ。雀は長さが五・五センチ前後である。

これらの紋様は、光沢の多い薄浅葱の地質によく映える対照のよい色調で構成されている。色調は柔かく、あてやかで、適当な締まりがあり、侵しがたい気品を備えている。使用繻糸は図版を一目してもわかるように暖色系が大半を占めている。橙色がかつた紅(サモンピンク)が最も多く用いられており、次に薄紅(薄いトキ色、薄いピンク)、次に黄(黄金色に見える)。(4)の松皮菱の一部と菊の芯に使用されているのと同じ色)、萌黄、鶉色、茶、紫(きれいな色の紫、損傷もない)、白、濃浅葱、濃萌黄の十色で、何れも絹の平糸である。

色糸の使いわけは次のようになっていいる。九枚笹の丸は五種類の色があり、計二十一の中橙色がかつた紅、即ちサモンピンクが九(—胸服自体の前後左右の位置でのべる—左胸の上、右胸の上、背の上、左袖後の左右、右袖後の上と左、左脇の前、右脇の上)、薄紅が七(背の左、左袖後の上、右袖後の右、右胸の右、左胸の左、左脇の後、右脇の前)、黄が三(右胸の上、左脇の上、右脇の後)、萌黄が一(背の右)、紫が一(左袖後の左)である。笹の丸には黄色で縁取りがしてある(挿図20参照)が、黄色の笹の丸の縁取りは萌黄が用いてある。節は縁取の糸と同色になっている。葉は萌黄、鶉色、黄、薄紅、サモンピンクの五色が適宜柔かい調子に組み合わせられている。

雀は茶色とサモンピンクの二種類で、各紋様とも二色の雀が相對して
いる（茶の雀——左胸は左、右胸は右、背は左、左袖後は左、右袖後は左、左
脇は前、右脇も前である。従つてサモンピンクの雀は各々その逆側についてい
る）。

雀の腹部、顔面は、茶色のもサモンピンクのも白で、また目、くちば
し、頬の点も双方とも濃い浅葱である。脚は黄色と濃い萌黄の二種類が
あり、別に使い分けはなく、適宜に行われているようである。羽の線繡
は、何れも肩の部分が黄、背や羽の下部が茶、尾は白で、量感質感を
出すのに相當に繊細な配慮がなされている。

刺繡技法も(2)(3)(4)同様、室町・桃山期の刺繡の特徴が顕著で、大部分
が渡し繡、それに線繡の抑えが入り、纏繡が加つてゐる。

刺繡技術は極めて優れており、模様が鮮やかに浮き出し、雀など飛翔
の動感が実によく表現されている（挿図20参照）。渡し繡の繡糸はよく目
がつんで揃つており、刺繡部分に紙の裏打はないように観察されたが、
いささかのひきつきも見られない。(2)(3)の刺繡技術と共に秀抜な技術が
認められ、この三領の刺繡は同じ手ではなからうかと推察される。

大胆かつ細心周到な意匠は上杉家伝来の服飾品に共通した点で、この
胴服には(1)(2)の胴服に次いでこの特徴が顕著に見られる。華やかにあで
やかな色調でありながら、胴服全体から受ける感じは圧倒的な威容と気
品で、この点では(1)(2)の胴服に比肩し得ると思われる。意匠効果、裂
地、染、繡、仕立の技術等総じて優れており、(1)(2)の胴服に次ぐ優品だ
と考えられる。

（形状、法量、仕立て方）

形状、法量は一覽表（報告四、上、美術研究二四二号）の(5)、袷仕立であ
る。裏は通し裏、袖口にも裾にも施はなく、突き合わせになっている。裾
の背割れ側の端は、両方とも裏側に剣先風な棲の仕立がしてある。背縫の
折被せは表裏ともわれわれがいう正常な方向（美術研究二二八号、二〇頁、
挿図3参照）になっている。

縫い方は、小袖(10)（美術研究二二八号、小袖(10)参照）の袷仕立とほぼ同じで
ある。袖口下、背縫と両脇縫、衿附（両脇と衿附は裾から約三センチ間は表裏
別々に縫つてある）は四つ縫がしてあり、袖附、襟附は三枚一緒に縫つてか
ら一枚がくけつけてある。具体的にいうと、袖附は、表袖と表身頃と裏身
頃の三枚が一緒に縫つてあり、その後で裏袖がくけつけてある。襟附は、
襟の外側の襟附と表身頃、裏身頃の三枚が一緒に縫われ、その後で、襟の
内側の襟附部分がくけつけてある。その襟附には衿下りから二センチ下
った位置に底辺一一センチ、高さ五センチの二枚くけ合わせの袷の三角裂
が挟み込んであり、三角裂には二・三センチ幅、長さ五〇センチの胸紐が
挟みこんである。紐は両方ともわなが上、縫目が下についている。袖口に
は袖山から二七センチ下った位置に白絹糸で二回巻き結つたとめがしてあ
る。

縫糸は比較的細い白絹糸S撚。縫目は約〇・五センチ、くけ目も比較的
こまかく一・二センチ前後、小袖(10)と異り、針目も揃つていて流れたりし
ておらず、四つ縫としてはこまかい針目の仕立であるにもかかわらず、き
つりなど全くなく、極めて立派な仕立である。

（表裂）

地合は経の三枚綾で（右上り）、経糸は一センチ間に六〇本前後、緯糸は一センチ間に三八本前後、経糸は殆ど撚がなく、裂地に光沢を与えている。藍の後染で、薄い藍に二浴乃至は三浴させたものであろう。

（襟裂、裏裂）

襟と裏と紐の裂は同質で、紅の練緯。地合は経糸は細く一センチ間に四本前後で二本ずつ寄っており、緯糸は一センチ間に三八本前後。紅の後染で褪色が少い。

30 註

註3（報告四、上、美術研究二四二号、一一頁）参照。

31 胸服(3)(4)(5)の紅染

(3) 白地桐文綾、襟繡胸服の紅染

表襟の紅色 10R 6/10

裏裂の紅色 10R 5/12

紐（組紐）の紅色 7.5R 5/14

表襟の染色について

(2) の辻ヶ花染の襟裂同様、極めて純度の高い紅にて染色。この表襟の紅染は、始めから薄い色に染めてあったと思われる。

裏裂と紐の染色について

(2) の身頃の染色と同様帯黄色の紅（緋）で、黄色の下染が施された上に紅染したか、或は紅花餅に含有する水溶性の黄色素を完全に溶出しないで紅染したかの何れかと考えられる。

(4) 白地五重繡牡丹唐草文綾、襟繡胸服の紅染

表襟の紅色 10R 6/10

紐の紅色 10R 6/14

表襟と紐の染色について

(2) の身頃、(3) の裏裂と紐と同様に考えられる。

(5) 浅葱綾竹雀紋繡、襟摺箔描繪胸服の紅染

襟裂、裏裂、紐の紅色 7.5R 5/12
襟裂、裏裂、紐の染色について

(2) の身頃、(3) の裏裂と紐、(4) の表襟と紐と同様に考えられる。以上の推定は褪色実験における色相変化と符合させて考えてみた。鈴木孝男（報告四、上、美術研究二四二号、四、五頁参照）

32 襟裂を透かして見たところでは、刺繡部分に紙の裏打が行われている様子は認められない。

33 東京国立博物館蔵品の室町・桃山期の刺繡に当たってみても、比較的広い面積の無地の部分を表現する場合には、この扇面に見られる繡法が用いられていた。

34 東京国立博物館蔵品のアイヌ旧蔵肩裾（挿図13）や勝手神社蔵の肩裾の一つなど肩裾の中でも比較的時代の古いものの模様の中に、あこだ瓜、或はあこだ瓜様の模様が見られる。

35 小袖(1)、(2)の袖口の袖と同様な方法。

36 袖下の折被せは、左袖は袖口下は表裏共前が高く（上に）なっており、袖附のところは裏は前が高く、表は後が高くなっている。即ち、この左袖の表袖の袖下は縫代がねじられた恰好になっているなど、袖口下や衽つけの折被せには表裏共に統一性が無い。

37 静岡市宇都谷の石川家に伝来した胸服で、昭和三十七年八月、山辺知行氏によって発見された。天正一八（一五九〇）年秀吉が小田原征伐に向った際、宇都谷峠で馬の草鞋が切れた時、石川家の祖先が二足の草鞋を差し出して「一足は勝ってお帰りの折りに」と言ったとかで、その言葉に氣をよくした秀吉が、胸服を脱いで与えたのがこれであるといわれる。それ以後、石川家には「お羽織屋」という名がついて、上り下りの大名がここでお羽織拜見に立ち寄り、家運が栄えたということである。

紙衣の胸服で、綿は厚く入っており、袖は平袖（袖巾は袖山で二一センチ、袖下で二〇センチ、袖丈は五〇センチ）、衽があり（衽下りは約一〇センチ、衽幅二三センチ、合襖幅二二センチ、立襖二二・五センチ）、襦は無い。裏（通し裏）と襟と袖口、胸紐、胸紐が挟みこんである三角裂は紅の練緯で、襟（襟幅は一五センチ、襟の折り返しは内側のようにある）と袖口（幅九・五センチ）には松皮菱地に菊の折枝の模様刺繡であらわされている。胸紐は三角裂（底辺九・五センチ、高さ四・五センチ）

の上端が襟附の肩山線から三七センチ下った位置についており、三角裂に挟みこまれた紐には摺箔で五三の桐（一つの桐の幅が約二センチ）がつけられている。紐は長さは不明であるが幅は約三・五センチで、左右ともわなが上に縫目が下になっている。

身丈は一一七センチ、衿は五三センチ、後身幅は肩山で三二センチ、裾で三八センチ、前身幅は衿下りの位置で二九・五センチ、裾で三八センチ。紙衣の紙一枚の大きさは長さが二七センチ、幅は明確にはわからないが四〇センチ近いことが推測された。

お羽織拝見の度に出し入れして見せたためか損傷して原形を失いかけて来ていたので、昭和三八年から三九年にかけて共立女子大学家政学部服飾研究室で修理を行った。挿図16の写真は修理後撮影したものである。

なお、高田装束店の高田義男氏は、この胸服の復元模造を三領、昭和三九年に完成された。三領中一領は高田装束店に保存され、あとの二領は大阪市立博物館と共立女子大に納められた。

38 上杉家伝来のは花や葉の表現を、大きく渡し繡して、花卉や葉脈の線繡でおさえているが、石川家伝来のは花卉も葉も輪郭線を残して、糸を短く渡し繡している（図版II b、挿図16 b参照）。

39 和服の特徴の一つに肩に縫目がないことがある。即ち、前身頃と後身頃、前袖と後袖は左右各々細長い一枚の裂で出来ているから、洋服のように前身頃と後身頃と別個の裂を肩で縫い合わせて繋ぐ肩の縫目はない。従って和服地では連続模様の場合、模様構成に留意しないと肩、袖山を境に片側では模様がすべて逆さまになる恐れがあるわけで、そのため、和服地の連続模様には一応逆転のない柄が考慮されている。この胸服の裂地に見られる牡丹唐草の上下の向が一段ずつ交互になっているのも、模様としてどちらが上とも下ともつかない逆転のない柄になっている。さきに報告した上杉家伝来の小袖の中、竹に雀の地紋の綾小袖九領や胸服(3)の桐文綾では、織文様の向が肩山線できき合わせになっていて、前も後も文様の一つ一つが上向になるといった凝った織物である。

40 銀箔の跡のようなものも見られないではないが、箔で明瞭に残っているのは金箔ばかりである。

41 胸服の各刺繡部分を透かして見たところでは、刺繡部分に紙の裏打が行われている様子は認められない。